

## 十二支の植物にまつわる由来・詳細補足

・十二支の概念は殷時代の中国で生まれたもの。もとは「子、丑、寅・・・」の文字であったが、その後、人々の身近な存在である動物に当てはめて考えられるようになった、というのが一般的。が、中には動物以外の由来もいくつかあるようです。

・植物の成長状態に関する記述として・・・

「もともと動物との関連は全くなく、たとえば”子(シ)”は”孳”(ふえるの意)で新しい命が種子の中に萌し始める状態、”丑(チュウ)”は”紐”(ひも・からむの意)で種子の中で萌芽がまだ伸びきれない状態というように、季節による草木の成長の状態を表した語を記号として用いたもの」※資料①p.182 より

「殷の後、王朝が移り変わるなかで十文字と十二文字に新たな意味解釈が加えられていく。十干は、草木の種子が発芽して成長し、枯れて再び種子に戻るまでを、十二支は、新たないのちが種子などの内部から萌え出て成長し、衰滅して再びいのちが内蔵されるまでを表している」※資料④p.70-71 より

「十二支は、もとは音読みしたもので、その文字の形を象形文字といい、植物が種から発芽し、生長し、実を結ぶまでを表したものとされている」※資料②p.175 より

「十二に分けた習慣の延長線上に十二支があったため、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の漢字があてはめられたが、もともこの十二個の漢字は動物を指していたわけではない。元来は草木の成長位相を表すともいわれてきた」※資料⑤p.31 より などが確認できた。が、いずれの資料も十二支すべての文字の由来が解説されているものではなかった。

また、別の由来として「十二支は漢の頃になると鼠をはじめ牛や虎・兎・竜・蛇・馬・羊・猿・鳥・犬・猪などの十二獣がこれに擬せられるようになった。おそらくそれは天空にまたたく星座の配置から連想したものであろうといわれる」というものもあった。(参考文献も載っているが所蔵もNDLでの資料詳細も確認できなかった)※資料⑥p.3 より

参考までに、その他の由来は上記以外の資料③⑦で確認できる。

・新たに資料⑧から、正解を発見。「十二支は植物の生長段階を象徴として語と図形が生まれた。」とある。以下、十二文字すべての植物由来の記述・・・

子・・・p.501 「子は孳なり。陽気初めて萌し、下より孳生するなり」と解する。「小さいものが殖える」というイメージを借りて、植物の生長段階の最初に喩え、子を十二支のトップに置いたと考えられる。植物が発生して次々に殖えていく状態を象徴とする。

丑・・・p.902 植物が固くならず柔軟性を保持する状態。

寅・・・p.38 植物が枝葉を伸ばす段階。

卯・・・p.1183 植物が土を冒し出て茂る状態、芽や茎や葉を両側を開く段階を想定している。

辰・・・p.690 植物が盛んに生長する段階。

巳・・・p.502 種子のでき始めることを象徴。

午・・・p.385 折り返し点。

未・・・p.1213 植物の枝がまだ伸びきらない状態。

申・・・p.687 植物の枝が十分に伸びた状態。

酉・・・p.1254 植物が老いた状態、あるいは成熟した状態。

戌・・・p. 記述なし。

亥・・・p.137 「隅まで張り詰めて、そこでつかえて止まる」、あるいは「固い所（大地の果て）に当たってつかえて止まる」というイメージに展開。

以上。戌に関しては、文字そのものが辞典に載っていなかったので不明。